2025 年 12 月 4 日

Library of the Year 2025 選考委員長コメント

NPO 法人知的資源イニシアティブ（IRI）理事
Library of the Year 2025 選考委員長
岡野 裕行

通算で 20 回目となる Library of the Year 2025 は、2025 年 10 月 24 日（金）の最終選考会をもって無事に終えることができました。選考基準に「他の図書館等にとって参考になる優れた活動」「独創的で意欲的に取り組んでいる具体的な活動事例」を表彰すると示した通り、それらの特徴を体現した図書館または図書館的活動として選ばれた 6 活動の関係者のみなさまには、心よりお祝いの言葉を申し上げます。

毎年の Library of the Year の運営は、第一次選考会と第二次選考会における議論を担当していただく選考委員となる候補者を決定し、依頼をかけるところから始まります。今年度は男性 10 名、女性 11 名、あわせて 21 名の選考委員（昨年度からの継続者も含む）の方々に関わっていただきました。図書館の館種の違いや特色ある図書館的活動にも広く目を配れるように、地域別、分野別、世代別、ジェンダーバランスなどの条件を考慮して、さまざまな分野の専門家にお声がけをしました。Library of the Year のコンセプトにある「良い図書館を良いと言う」の理念を念頭に置きながら、選考委員がそれぞれの観点を持ち寄り、「良い」という言葉に到達できるように全員で議論を積み重ねていただきました。

■候補活動の募集

今年度の選考過程では、2025 年 6 月 4 日（水）から 7 月 2 日（水）までの期間に公式ウェブサイトで募集していた一般公募活動（11 活動）と、Library of the Year 2025 の選考委員による推薦活動（14 活動）とをあわせた計 25 活動が選考の対象となりました。数としては例年よりもやや少なめでしたので、過去に受賞にならなかった活動が再度推薦されてもよかったように思います。

候補活動の推薦については、昨年度に変更したものを踏襲しており、推薦文に記述できる文字数に上限を設定し、それぞれの一推しのポイント（突き抜けていると評価できる取り組み）がより明確になるようにしました。限られた文字数のなかでの推薦となるため、書きたいことがうまく盛り込めずに思うような推薦文にしづらかったというご意見もいただきました。とはいえ、文字数の分量についてはすべての候補活動で同一条件となっておりますので、そのあたりは推薦者の工夫で活動のポイントを簡潔にまとめていただくようにお願いしました。

■第一次選考会

すべての応募情報を取りまとめた上で、そこから書類審査による第一次選考会を 7 月 12 日（土）から 8 月 2 日（土）にかけて実施しました。第一次選考会では選考委員が時間をかけてそれぞれの活動の推薦文を読み込み、各自の価値観や評価基準にもとづいて 100 点満点で評価します。選考委員は一人につき最大で 10 活動まで点数を評価表に入力します。点数を付与する活動の数は選考委員によって異なっており、もっとも少ない人で 5 活動、多い人は上限となる 10 活動を選んでいます。それら全員分の点数を合計して一覧表にまとめ、獲得した得点順にすべての活動を並び替えます。

その後、獲得した得点の上位から順番に第二次選考会へ進む活動を選び出していきます。オンライン会議による第二次選考会での議論に費やすことが可能な時間（2 時間程度）を考えて、第一次選考会では例年 12～14 程度の活動を選ぶようにしています。得点の上位から数えてボーダーラインを引こうとしてみると、今年度は 13 位と 14 位の間に開きが見られたため、第一次選考会では 13 位までの活動を通過することにしました。

■第二次選考会

第二次選考会は 2025 年 8 月 26 日（火）の 19:00 から Zoom を用いたオンライン会議にて行いました。例年通りに希望者には会議の様子を公開するという方針にしましたので、事前にお申込みをいただいた 28 名のみなさまには、当日の様子を傍聴していただくことになりました。ただし、第二次選考会において発言権があるのは選考委員のみであり、傍聴者は議論の様子を見聞きするだけ（Zoom のチャット機能も使用不可）という条件で参加をお願いしています。

第二次選考会では 1 活動につき 5 分間を目処に議論をしていきます。それぞれの冒頭に推薦者から 1 分程度のプレゼンをいただいた後に、残りの 4 分程度のなかで選考委員が相互に意見を出し合って当該活動の「良い」と思われる点を言語化し、全員に共有していきます。このやり取りを 13 活動のすべてについて、五十音順で繰り返します。1 活動につき 5 分間という時間配分は短いように思われるかもしれませんが、これを 13 活動について繰り返すことになりますので、少なくともそれだけで 1 時間を超えてしまいます。実際にはそれぞれに 10 数秒程度の超過時間も出てきますし、会議進行上の司会のコメントもございますので、多少の時間の超過が起こってしまいます。

前半の議論を終えると、即座に選考委員全員による投票を行ってもらいます。選考委員のみなさまにはあらかじめ配布してあるエクセルの評価表に、優秀賞にふさわしいと思える 3 活動に〇印を、優秀賞に相当する活動なかでも特に大賞にふさわしいと思える 1 活動に◎印を、ライブラリアンシップ賞にふさわしいと思える 2 活動に●記号を、合計で 6 活動に票を投じてもらいます。それらの投票用紙の集約をすみやかに行った上で、全得票数の集計結果を一覧表にまとめたものを選考委員に示します（集計結果の一覧表については傍聴者には開示しておりません）。

そこから後半の議論を再開し、今年度のライブラリアンシップ賞を 2 活動、優秀賞を 4 活動、合計 6 活動を選出することになります。例年だと投票結果が割れる傾向にあり、授賞する活動を決定する過程は議論が難航することが多いのですが、今年度に関しては得票数が高かったのは 6 活動になっていることが明白であり、それ以外の候補活動との差が開いた形になりました。このうち、【北摂アーカイブス】【松竹大谷図書館】の 2 活動についてはライブラリアンシップ賞として推している方が多かったために先に授賞を確定させ、それ以外の【オーテピア高知図書館と高知県図書館振興計画の両輪での推進】【新庄・最上地区の「地域まるごと学び場プラン」】【全国文化財総覧】【箕面市立船場図書館における大学図書館と市立図書館の一体的運営による社会連携の取組み】の 4 活動を優秀賞と決定しました。今年度のようにほぼ議論することなく結果が明白だったのは、これまでの Library of the Year を振り返ってみてもとても珍しいケースだったように思います。

例年であれば、第二次選考会の終了後に運営委員会によって特別賞の選考も行うのですが、今回は上位 6 活動とそれ以外の活動の間で得票数に大きく差がついてしまいましたので、特別賞については「該当なし」ということで結果を確定させました。

■ライブラリアンシップ賞を受賞した活動とその授賞理由

長期的な活動を評価するライブラリアンシップ賞には、【松竹大谷図書館】と【北摂アーカイブス】の 2 活動が選ばれました。

【松竹大谷図書館】は、授賞理由に「持続可能な専門図書館の運営および資料の保存や公開への取り組み」とあるように、映画、演劇、歌舞伎に関する貴重資料の保存や公開を行っていることもさることながら、繰り返し成功してきたクラウドファンディングの事例も高く評価されました。また、【北摂アーカイブス】については、授賞理由に「2010 年から続く協働に基づく共創型デジタルアーカイブの祖」とあるように、市民と行政が協働した形での長きにわたる地域のデジタルアーカイブ活動が評価されました。

この 2 活動については、過去の Library of the Year でも候補活動として名前が上がっており、【松竹大谷図書館】は 2016 年と 2017 年に、【北摂アーカイブス】は 2016 年に第二次選考会まで進んでいた経緯があります。いずれも 10 年前から注目されていた活動になりますので、今年度は満を持しての受賞と言えるでしょう。

■優秀賞を受賞した活動

優秀賞を受賞したのは、【オーテピア高知図書館と高知県図書館振興計画の両輪での推進】【新庄・最上地区の「地域まるごと学び場プラン」】【全国文化財総覧】【箕面市立船場図書館における大学図書館と市立図書館の一体的運営による社会連携の取組み】の 4 活動となりました。これら 4 活動についての講評は、最終選考会の記録と併せて後述します。

■最終選考会の審査員の確定

今年度の「Library of the Year 2025 最終選考会」の審査員を担当する 5 名については、「Library of the Year 2025 実行委員会」にて人選を行っています。

今年度の人選についても、例年同様に「多様な分野から選ぶ」「世代間のバランスを考慮する」「ジェンダーバランスを考慮する」「少なくとも 1 名はライブラリアンを含める」という基本方針のもとに依頼をしました。お願いするにあたっては候補者のスケジュールも考慮しなければならないため、実際に審査員を打診してみないことには顔ぶれを確定しづらいものとなります。

それぞれに予定を調整していただいた結果として、今年度の審査員 5 名は次の顔ぶれとなりました。有川保さんには弁護士の立場から、加納進さんには議会議員の立場から、呉屋美奈子さんには現役の公共図書館のライブラリアンかつ過去の受賞活動の関係者の立場から、佐藤翔さんには図書館情報学の研究者の立場から、渡部佳奈乃さんには現役の若手ライブラリアンかつ過去の受賞活動の関係者の立場からのコメントを期待し、審査員のお役目をお願いしました。

なお、議会議員の関係者としては、もともとは墨田区議会議員の佐藤篤さんにお願いしておりましたが、最終選考会の直前の時期にどうしても外せない公務が重なってしまったとのことで、代役として同じ墨田区議会議員の加納進さんをご推薦いただきました。審査員 5 名のお名前は事前に公式ウェブサイトでも公開しておりましたが、この変更点については当日に最終選考会の会場において説明をいたしました。

■最終選考会における審査員への問いと評価の観点

5 名の審査員のみなさまには、事前に「自らの審査のポイント／評価基準はどのようなものか」「その基準を今回の優秀賞受賞活動に照らし合わせた場合、どのような良い点やおもしろいと思える特徴が見えたのか」を言語化していただくようお願いしました。Library of the Year という賞は、「良い図書館を良いと言う」という選考プロセスをさまざまな立場の人たちによって積み重ねていく過程を重要視しています。選考委員会がまとめた授賞理由は最終選考会に先立って公開済みになっておりますが、最終選考会の審査員 5 名のみなさまにも改めてそれぞれの立場からの「良い」と思える点の言語化をお願いすることになります。

今年度の審査員のみなさまも、こちらの期待していた以上にそれぞれの立場から表現していただくことができたのではないかと思います。以下に 5 名の審査員が語ってくださった「審査のポイント／評価基準」の要点を示します。

●有川保さん

図書館法の目的に基づいた理念をどのように活かし、実現しているのか。すべての世代につながるような活動理念を持っているか。

●加納進さん
市民との協働・協創の痕跡を感じることができるか。地域の課題解決についてどのように向き合い、実際に取り組んでいるのか。市民目線から行ってみたい図書館になっているか。

●呉屋美奈子さん
受益者優先の図書館サービスを実現しているか。効率性、継続性、持続性のある情報サービスを行っているか。利用者に対してどのような価値を生み出しているか。

●佐藤翔さん
エポックメイキングな活動であり、それが高い完成度で実現されているか。その取り組みをほかの事業者が真似したいと思えるか、利用者の立場から真似してほしいと思えるか。

●渡部佳奈乃さん
「つなぐ」「つながり」「ハブ」などの機能を感じさせるような活動になっているか。人や世代が入れ替わったとしてもその活動が受け継がれていくことに期待が持てるか。

以上の評価基準にしたがい、優秀賞 4 活動に点数をつけていただきました。今年度の最終選考会においても「審査員全員がすべての優秀賞受賞活動に順位をつける」（1 位活動に 4 点、2 位活動に 3 点、3 位活動に 2 点、4 位活動に 1 点）という傾斜配分によって得点を付与する審査方法となります。5 名の審査員がつけた点数を合計した結果で評価することになるため、最高得点が 20 点、最低得点が 5 点ということになります。大賞に選ばれるためには、5 名の審査員のうちの過半数となる 3 名以上から 1 位票の 4 点を獲得することが求められます。

■最終選考会における審査員評価の結果

このような基準で得点を集計してみたところ、大賞となる活動は合計 17 点を獲得した【オーテピア高知図書館と高知県図書館振興計画の両輪での推進】に決定しました。獲得した 17 点の内訳を公表しますと、【4 点・4 点・4 点・3 点・2 点】となります。過半数に達する 3 名の審査員から 1 位票の 4 点を獲得しつつ、4 位票が入らなかったことを考えても、納得できる結果になっていると思います。

参考までに、ほかの 3 活動が獲得した得点についても公表します。昨年同様に、2 位以下については活動名と一致しないように、それぞれを A 活動、B 活動、C 活動と表記します。これは「優秀賞を取った時点で 4 活動すべてがすばらしい活動をしている」ことを強調したいためであり、大賞受賞活動のみが突出した印象になってしまうことを避けたいためです。最終選考会は優秀賞 4 活動に順位をつけることが目的ではありません。便宜的に点数をつけて大賞を選びましたが、その結果は活動に優劣が見られたというわけではなく、「優秀賞 4 活動の取り組みに差があるわけではない」というのが私たち主催者側の見解であ

るためです。

A 活動：14 点　内訳は【4 点・3 点・3 点・3 点・1 点】
B 活動：10 点　内訳は【3 点・2 点・2 点・2 点・1 点】
C 活動：9 点　内訳は【4 点・2 点・1 点・1 点・1 点】

2 位の A 活動は 14 点を獲得しました。大賞を受賞した【オーテピア高知図書館と高知県図書館振興計画の両輪での推進】とは 3 点差となります。1 位票も 1 票入っておりますが、特に顕著だったのは 2 位票がもっとも集まっていたことでしょう。大賞となった【オーテピア高知図書館と高知県図書館振興計画の両輪での推進】の次に位置づけた審査員が多かったのですが、この順番が逆になっていた（A 活動を 1 位、オーテピアを 2 位）と評価した方もいらっしゃいました。大賞の【オーテピア高知図書館と高知県図書館振興計画の両輪での推進】との差は 3 点差でしたが、どの審査員の方も相当に悩まれておりましたので、おそらく 1 位票と 2 位票を投じる際の判断はわずかな違いだったように思われます。また、B 活動は 10 点、C 活動は 9 点となっておりましたが、これは B 活動に 3 位票が、C 活動に 4 位票が集中したことによる違いでしょう。それでも C 活動には 1 位票も含まれておりますので、4 位票が多かったなかでも高い評価を与えた審査員の方もいらっしゃいました。

結果としては上記のとおりですが、毎年の Library of the Year では、大賞受賞活動を選ぶために便宜的に点数をつけていただいておりますが、4 活動ともにすばらしい活動をしていた事実は揺らぐことはありません。大賞という称号は「優秀賞の 4 活動のなかからあえて 1 活動を選ぶならどれになるのか」という趣旨のものであり、表彰された活動はいずれも今年の Library of the Year 2025 を代表する活動ばかりだと言えるでしょう。

■優秀賞を受賞した活動の授賞理由

優秀賞を受賞した【全国文化財総覧】は、授賞理由のとおり「発掘調査報告書を始めとした文化財情報の Web 上での発信と展開」という点が評価されました。プレゼンのなかでは、「発掘調査報告書」が有する特性（①公共性・学術性、②ニーズ、③灰色文献）が指摘された上で、「文化遺産の記録をすべての人々へ」「すべての文化財情報を流通させる」という理念が強調されました。GIGA スクール構想が進む小中学校での活用事例や、ウィキペディアの記事からの言及も増加していることが示されたほか、AI によって膨大な報告書テキストを活用する方法も示されるなど、今後もさらなる活用の広がりが期待されます。スライドの冒頭に掲げた「文化財をひらく」という活動が見事に表現されておりました、

同じく優秀賞の【箕面市立船場図書館における大学図書館と市立図書館の一体的運営による社会連携の取組み】は、授賞理由のとおり「市立図書館と大学図書館の機能を活かした市民と大学のハブ的活動」という点が評価されました。国立大学が指定管理者として運

営する初の事例であること、また、公立図書館と大学図書館の機能をあわせ持つという点で、全国的にもユニークな図書館であることが強調されました。活動コンセプトとして、①高度なグローバル人材を育成すること、②日本語・日本文化を世界へ発信すること、③外国語・外国学研究の成果で地域の市民と世界を結ぶことなどを掲げ、地域社会との共創の実現を目指すという理念が示され、特色のある活動事例と一体的運営のメリットが紹介されました。

優秀賞に加えてオーディエンス賞を受賞したのは【新庄・最上地区の「地域まるごと学び場プラン」】となりました。授賞理由の「市民発「とらいあ」による地域全体を視野に入れた戦略的事業展開」にもあるように、プレゼンのなかでは「新庄・最上ジモト大学」のさまざまな事例が紹介され、「地域のヒト、モノ、コトすべてが教材、教室に」という基本的な姿勢が強調されました。「学びのネットワーク作り」「学びを通した地域づくり」という活動には、「大人が学び続けるその背中を高校生に見せる」「何もないと言われるまちには、何でもできる余白がある」という思いが込められているという主張には、自分たちの暮らす地域の持つ力に対する誇りが込められており、オーディエンスの心を強く打ったのだと思います。

そして今年度の大賞は、【オーテピア高知図書館と高知県図書館振興計画の両輪での推進】となりました。授賞理由に「両輪」とあるように、「これからの高知を生きる人たちに力と喜びをもたらす」という基本理念が語られるとともに、「県全体の読書・情報環境の改善と充実」を目指す『高知県図書館進行計画』に基づくものであることが示されました。課題解決支援などは県市の共通業務として設定し、市町村支援は県独自に、市全域サービスは市独自に行うなど、それぞれに役割を分担しながら「協働」するパートナーとして一体的にサービスを展開する方法が示されました。また、オーテピアの開館以降の動向として、高知県内の市町村支援にも活かせる資源共有が進むとともに、県内のほか自治体にも新図書館計画の動きが出てくるなど、『高知県図書館振興計画』の理念が着実に浸透していることが伝わってきます。

■最終選考会におけるオーディエンス賞の結果

会場投票によって実施したオーディエンス賞の票数の内訳もご報告します。有効票数は46 票で、【新庄・最上地区の「地域まるごと学び場プラン」】はそのうちの 18 票（得票率39％）を獲得しました。そのほかは、X 活動が 12 票（同 26％）、Y 活動が 9 票（同 20％）、Z 活動が 7 票（同 15％）となります。前述した大賞の報告と同様に、2 位以下の活動名は記号に置き換えます（大賞の結果と順位が異なるため、前述した A・B・C 活動とは異なる X・Y・Z 活動と表記しています）。

オーディエンス賞の結果は、1 位となった【新庄・最上地区の「地域まるごと学び場プラン」】が全体の 39％の得票を獲得しており、2 位以下と差を広げて頭ひとつ抜け出ておりますので、受賞についても納得できる形になっていたと思います。全体的な有効票数は

昨年や一昨年よりも若干少ないですが、いずれのプレゼンテーションもすばらしいものでしたので、オーディエンスのみなさまもそれぞれに投票先を悩まれたことと思われます。

■20 回目の Library of the Year

また、今年度の最終選考会については、活動 20 回目を記念して「Library of the Year 20 周年記念フォーラム」との同時開催という形を取りました。2015 年の際にも「Library of the Year 10 周年記念フォーラム」を実施していたことに倣い、節目のタイミングでこれまでの Library of the Year の活動を振り返ることにしました。

例年の最終選考会は 1 枠 90 分間での実施となるため、分刻みでの進行となってしまいましたが、今年度については 2 枠 180 分間での実施となるため、進行にも余裕を持って進めることができました。大まかな進行スケジュールは以下のとおりとなります。

【1 枠目】

●Library of the Year 20 周年記念フォーラム①（約 15 分）
これまでの受賞活動（2016～2018 年）のビデオメッセージ上映

●Library of the Year 2025 最終選考会①（約 75 分）
優秀賞受賞活動によるプレゼンテーション、審査員討論会

【2 枠目】

●Library of the Year 20 周年記念フォーラム②（約 15 分）
これまでの受賞活動（2019～2024 年）のビデオメッセージ上映

●Library of the Year 2025 最終選考会②（約 40 分）
優秀賞の表彰、ライブラリアシップ賞の表彰および受賞記念コメント、
オーディエンス賞の発表および表彰、大賞の発表および表彰

●Library of the Year 20 周年記念フォーラム③（約 40 分）
選考委員長 2 名（山崎博樹と岡野裕行）によるパネルトーク

ビデオメッセージの部分については、各年度の大賞受賞活動を中心として依頼を進め、それぞれに約 3 分間程度の長さの動画を作成いただきました。それらを一本につなぎ合わせると合計 30 分程度の長さになるため、1 枠目と 2 枠目の冒頭部分で約 15 分ずつ上映をいたしました。いずれの受賞活動の関係者からも、Library of the Year の受賞がそれまでの活動を振り返る良いきっかけになっていることが語られました。また、それぞれの受賞活動の現在地も併せてご紹介いただいたことで、Library of the Year という事業そのものが果たしてきた役割も改めて確認することができました。日々の業務でお忙しいなか、ビデオメッセージの作成にご協力をいただきましてありがとうございました。

最終選考会の後の 20 周年記念フォーラム③では、前選考委員長の山崎博樹と現選考委員長の岡野裕行の 2 名により、2016 年から 2024 年までの Library of the Year を年代順

に振り返るという時間を設けました。それぞれの年度における選考過程の思い出や、各活動の現在地がどのようになっているのかなどの話をしました。たとえ受賞に至らなかった活動があったとしても、翌年以降の Library of the Year において再度候補として名前が上がり、その後に受賞に至る事例も多かったことにも触れました。2006 年から Library of the Year という活動が休むことなく継続的に行われてきたことで、多くの活動の表彰につながったということを感じております。

■謝辞

2025 年 6 月から 11 月までの約 5 か月間にわたって実施してきた今年度の Library of the Year 2025 は、2025 年 10 月 24 日（金）の最終選考会の開催をもって無事に終えることができました。すべての関係者を代表して、関わってくださったみなさまには改めてお礼を申し上げます。

公式ウェブサイトの応募フォームから推薦活動の情報をお寄せていただいた全国各地のみなさま、ありがとうございました。本事業は「良い図書館を良いと言う」ための取り組みですが、何よりもまず選ぶ対象となる候補活動が推薦されてこないことには始めることができません。選考委員による推薦活動もございますが、一般公募によってその存在を知る活動も多く、さまざまな取り組みについて学ばされることが多いです。今年度も過去に受賞に至らなかった活動が改めて推薦され、受賞へとつながっていったように、何度でも継続的に推していくことも重要なように感じています。

第一次選考会と第二次選考会において議論を尽くしてくださった 19 名の選考委員のみなさま、ありがとうございました。候補活動に対するそれぞれの思いが込められたご意見が飛び交い、選考委員会としての議論を深めていく過程はとても刺激的で楽しい時間でもありました。また、受賞活動を決定してからも、短期間のうちに授賞理由のご執筆もいただいたことにも改めて感謝申し上げます。

最終選考会へのご登壇を快くお引き受けくださった 5 名の審査員のみなさまもありがとうございました。最終選考会は毎年の Library of the Year のなかでもっとも注目が集まる時間になります。審査にあたっての事前準備のご負担も大きいと思いますし、審査員として発する言葉の一つひとつに責任を感じてしまう役回りかと思います。優秀賞を受賞した 4 活動のどこが「良い」のか、審査員として何を「良い」と思ったのか、責任感をともなった鋭く暖かい言葉を最終選考会の会場で披露していただいたことで、次の時代の図書館のあり方に参考となる考え方へと導かれたと思います。

最終選考会でプレゼンをしてくださった各受賞活動のみなさまもありがとうございました。Library of the Year は知的資源イニシアティブ（IRI）が一方的に授与している賞ではありますが、各受賞活動のみなさまが快く賞を受け取っていただき、受賞コメントのなかで喜びの声をお聞かせいただけることは何よりの励みになります。今回の受賞によってそれぞれの突き抜けた活動がさらに注目されるようになることを祈念しております。今後も

ぜひ新しくて刺激的な活動に取り組んでいただけたらと思います。

本事業の協賛社である株式会社内田洋行、キハラ株式会社、富士通 Japan 株式会社、株式会社寿限無、株式会社カルチャー・ジャパンの 5 企業のみなさまには、それぞれにオリジナルの木製トロフィーの製作・提供、賛助金のご提供、副賞となるブックトラックのご提供、最終選考会の会場提供など、さまざまな形で Library of the Year へのご協力をいただきました。各社・各活動のみなさまには、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。Library of the Year の仕組みを突き動かしているのは「他の図書館等の参考となる先進的な取り組み」を言語化しようとする思いによるものですが、運営を資金面から支えてくださるみなさまのお力添えがあってこそ、このようなイベントとして成り立たせることができています。また、ウェブやメールマガジンでのイベント告知にご協力いただいた図書館総合展運営委員会のみなさまもありがとうございました。毎年のように安定した形で Library of the Year が実施できているのは、図書館総合展のフォーラムの一つに加えていただけていることが大きいと思いと改めて感じております。

そして、最終選考会の会場に足を運んでくださった多くの参加者のみなさまもありがとうございました。会場での各受賞活動のプレゼンや審査員討論会をご観覧いただき、オーディエンス賞の選考にご投票をお願いすることも「Library of the Year 2025 最終選考会」の重要な過程となります。ご来場してそれぞれの価値観で 1 票を投じてくださったみなさまのおかげで、最終選考会の結果がさらに盛り上がったと思います。

今年度もさまざまな人たちのお力添えをお借りしたことで、Library of the Year 2025 を無事に終えることができました。この場をお借りして、改めてみなさまに感謝の言葉を申し上げます。

■現体制の終了と次年度以降の開催について

「Library of the Year 20 周年記念フォーラム」の会場でも最後にお伝えしましたが、今後のことについても記しておきたいと思います。NPO 法人知的資源イニシアティブ（IRI）では 2006 年より Library of the Year の事業を続けて参りましたが、20 回目の節目を迎えたこともあり、いったん現体制による活動を終了することになりました。次年度以降は開催形式を少し変更しながら進めていく予定です。

それに伴い、選考委員長としての私のお役目も今年度で終わることになります。私自身は 2011 年から Library of the Year に委員の一人として関わり始め、2021 年からの今年度までの 5 年間は選考委員長の立場から本事業を進めてまいりました。次年度以降の開催形式は現時点では確定しておりませんが、引き続き「良い図書館を良いと言う」の理念のもとに次の活動を表彰できればと思います。

以上

受賞活動コメント

【Library of the Year 2025 ライブラリアンシップ賞】

■松竹大谷図書館

この度、Library of the Year 2025 ライブラリアンシップ賞という、図書館員にとって大変光栄な賞を賜りましたことを、選考委員の皆さま、そして日頃より当館の活動を支えてくださっている多くの皆さまに、心より感謝申し上げます。

当館は、演劇・映画の専門図書館として、1958 年の開館以来 70 年近くにわたり、演劇・映画関連の資料の収集・保存・そして一般への公開に取り組んでまいりました。しかしその活動を維持するための資金確保は、常に大きな課題でした。

2012 年、当館は健全な運営を続けることで貴重な所蔵資料を未来につなげたいとの想いから、クラウドファンディングに挑戦し、結果、多くの方から応援と共にご支援を頂き、無事成立することができました。日本初のクラウドファンディングサービスである READYFOR が発足して 2 年目の事で、「クラウドファンディング」という言葉自体まだ世間に浸透していない中、専門図書館による運営費を募るためのクラウドファンディングは、国内では前例がなく、この成功は、当館にとっても、また数多くある専門図書館の活動の可能性を広げる意味でも、大きな一歩であったと感じております。

以来 13 年、毎年テーマを掲げて継続してきたクラウドファンディングの成果により、資料の保存やデジタルアーカイブの公開、そして電動書架の整備などを一つひとつ実現してまいりました。そして、13 回のクラウドファンディングで延べ支援者数 3,144 名、累計 4 千 69 万 9 千円のご支援を頂く事が出来ました。

この 13 年間の成果は、当館の活動を信じて応援してくださった支援者の方々が、日々、現場で資料と向き合い、着実に作業を続けてきた私共スタッフの活動に共感し、支えてくださった結果であると、改めて実感しております。この 13 年間の活動を評価して頂いたことを励みに、当館はこれからも、演劇・映画の貴重資料を次世代につなぐために、尽力してまいります。引き続き、皆さまのご指導とご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

松竹大谷図書館スタッフ一同

【Library of the Year 2025 ライブラリアンシップ賞】

■北摂アーカイブス

このたび「Library of the Year 2025 ライブラリアンシップ賞」という栄誉ある賞をいただき、心より感謝申し上げます。まず、15 年にわたり北摂アーカイブスの活動を支えてくださった地域フォトエディターの皆さまに、深い敬意と感謝を捧げます。写真を提供し、インタビューや編集に参加し、写真展やイベントで地域の記憶を共有してくださった地域住民、団体、企業、機関などの力なくして、この取り組みは成り立ちませんでした。

また、審査員の皆さまには、私たちの「協働と共創」の理念を高く評価していただき、誠にありがとうございます。平成 22 年（2010 年）の立ち上げ以来、図書館は地域とともに地域の記憶を未来へ継承するため、デジタル化や保存にとどまらず、活用の場を広げるように頑張ってきました。地域フォトエディターの育成や、二次利用のハードルを下げる規約改正など、試行錯誤の連続でしたが、その一歩一歩が新しい図書館像を形づくる礎となりました。

この活動は、単なるアーカイブ構築ではなく、地域の人々が記憶を共有し、語り継ぐための「場」をともにつくる取組みでした。「共創」という言葉が広まる前から続けてきた実践が、全国のモデルとなったという授賞理由は褒めすぎで照れくさいですが、各地域で広がりを見せるきっかけとなったならそれは本当に誇りに思います。

これからも地域とともに歩み、地域の記憶を地域の記録へつなぐ取り組みを進めていきます。

豊中市立岡町図書館
西口　光夫

【Library of the Year 2025 優秀賞・大賞】

■オーテピア高知図書館と高知県図書館振興計画の両輪での推進

Library of the Year 2025 優秀賞・大賞を賜りまして、深く感謝申し上げます。

オーテピア高知図書館は、全国で初めて県と市が共同運営する図書館として 2018 年に開館しました。その構想段階で、立地する高知市だけではない県全体の読書・情報環境の改善を望む声を受け、高知県教育委員会が「高知県図書館振興計画」を策定しました。高知県と高知市は「地域を支える情報拠点」としてオーテピア高知図書館を整備し、県全体の読書・情報環境を改善するための取組を一体的に進めてきたところです。

この栄誉は、日頃から図書館を利用していただいている県民・市民の皆様、県内市町村立図書館の皆様をはじめ、関係者・団体の方々の図書館活動へのご理解とご協力の賜物であり、その喜びを皆様とともに分かち合いたいと思います。

オーテピア高知図書館のミッションの一つに、県内の読書・情報環境の改善があります。人口減少が進み、コミュニティが小さくなる時代にあって、図書館同士がつながり、図書館が地域の学びを支え、情報面でセーフティネットとして機能していくことがより一層求められていると考えています。

今後も、オーテピア高知図書館における図書館資源を継続的に確保し、取組のさらなる発展を目指すとともに、図書館間の連携強化に努めてまいります。

併せて、県内のすみずみまで読書・情報環境の改善を実感できるように、職員一同、日々の業務に取り組んでまいります。皆様方のお力添えを賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、20 周年を迎えた Library of the Year のさらなる発展をお祈り申し上げます。また、この 20 年のすべての受賞館・取組に敬意を表すとともに、これからエントリーする未来の取り組みにもエールを送り、受賞のコメントに代えさせていただきます。誠にありがとうございました。

高知県立図書館長
高知市立市民図書館長
高知県教育委員会事務局生涯学習課長
オーテピア高知図書館職員一同

【Library of the Year 2025 優秀賞・オーディエンス賞】

■新庄・最上地区の「地域まるごと学び場プラン」

このたびは、Library of the Year 2025 において、オーディエンス賞を賜り、心から感謝申し上げます。

人口 3 万人程度の小さな地方都市である新庄市の図書館。市から指定管理を受けて 16 年になりますが、試行錯誤を繰り返しながら 1 年 1 年を過ごしてまいりました。

最上地域の高校生が在学中に、地域の本気の大人との「対話」の場を設けることで、地域との関わりの大切さ、当事者意識を身に付けることを目的とした「新庄・最上ジモト大学」の事務局を引き受けたのが 2017 年。新庄市立雪の里情報館の指定管理を受けたのが 2020 年、山形県立新庄病院図書室の業務委託を受けたのが 2023 年。

当初から「地域まるごと学び場プラン」の構想があったわけではありません。一つ一つ足場をつくりながら、地域の方が学びを通して交流できる「学び場」となるものを増やしてまいりました。

日本の多くの地域でみられるように、私たちの新庄・最上でも長年にわたって人材が流出してきました。あらためて今、「学び場」を増やし、学び合うことが楽しいと感じる人を増やしていきたいと考えています。VUCA（不安定で、不確実で、複雑で、曖昧）の時代、人生 100 年時代を迎えて、学び続けることがとても大切になっています。私たち一般社団法人とらいあは、地域の方と一緒に学び合う地域づくりに努力してまいります。

とはいえ、「地域まるごと学び場プラン」は始まったばかりです。地域の方々にとらいあの目的や活動を知っていただき、一緒になって「学び場プラン」をつくっていきたいと思います。

最後になりますが、私どもの活動をみつけていただき、遠くから何度も足を運んで話を聞いてくださった選考委員の皆様、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

一般社団法人とらいあ　職員一同

【Library of the Year 2025 優秀賞】

■全国文化財総覧

このたびは、Library of the Year 2025 優秀賞を賜り、心より御礼申し上げます。

全国文化財総覧は、文化財に関する様々な情報をオンラインで検索・閲覧できるサービスです。

この事業の始まりは 2008 年、島根大学を中心に中国地方の国立大学図書館が連携して構築した「遺跡資料リポジトリ」です。自治体等が発行する発掘調査報告書は公益性が高く学術的にも重要な資料ですが、入手が困難な灰色文献でした。これを電子的に公開し、アクセスの壁を取り除くことを目指したのがこのリポジトリ事業です。最終的に 22 府県域・21 大学が参加し、当時としては全国的に前例のない規模の約 14,000 冊の報告書を公開し、現在の基盤を形成しました。

2015 年に奈良文化財研究所へ移管し「全国遺跡報告総覧」として再スタートしたことで、行政機関との連携が加速し、公開冊数や参加機関数も大幅に増加しました。また、検索機能の強化に加え、報告書以外の文化財に関係する論文、イベント情報、動画などコンテンツの種類も拡充させました。さらに、遺跡の位置情報を地図上で表示できる WebGIS など、蓄積したデータを活用した新しいサービスも展開しています。そして、2025 年 3 月には「全国文化財総覧」に名称を変更しました。

こうした進展により、図書館では入手困難だった報告書を提供できる機会も増え、学校教育での歴史・地域学習や、Wikipedia 記事への引用など、社会での活用も広がっています。これらは、全国文化財総覧が、文化財と人・地域をつなぐ情報基盤として成長している証でもあると考えています。今後も、大学等の研究者・学生や行政機関はもちろん、一般市民を含む多様な方々の知的活動を支援する取り組みを続けてまいります。

最後に、これまで本事業に関わってくださったすべての皆様に改めて感謝申し上げます。全国文化財総覧が文化財の未来をひらく“知のインフラ”としてこれからも発展していけるよう、引き続きご支援賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

全国文化財総覧　運営一同

【Library of the Year 2025 優秀賞】

■箕面市立船場図書館における大学図書館と市立図書館の一体的運営による社会連携の取組み

この度は、「Library of the Year 2025 優秀賞」を賜り、御礼申し上げます。

箕面市立船場図書館は、国立大学法人が指定管理者として公立図書館を運営する国内初の事例として、大阪大学箕面キャンパスと一体の地に、2021 年 5 月に開館しました。この度の受賞理由として「市立図書館と大学図書館の機能を活かした市民と大学のハブ的活動」をご評価いただきましたことは、公立図書館と大学図書館の一体的運営による新しい図書館サービスの開拓と展開、そして大学の社会連携の方針にもとづく地域貢献、地域の活性化への寄与を志してきた私どもにとってたいへん嬉しく、また今後の活動にエールを頂戴したものと心強く感じております。

当館では、外国語学部を有する大阪大学箕面キャンパスが目指す、地域社会との共創の実現を念頭に、地域団体、教員・学生等本学構成員との連携事業として、市民の皆様が多文化に触れるイベントを開催しています。また、外国ルーツを持つ子どもたちへの支援として、箕面市の国際交流協会、大阪大学大学院人文学研究科附属複言語・複文化共存社会研究センターとの三者連携事業を週 1 回開催するほか、地域のまちづくり協議会と協働するなどして、地域の活性化に貢献しています。開館から 4 年半を迎え、これらの活動は、大学が有する知見を地域へ伝えるだけでなく、地域の皆様から本学構成員が刺激を得る双方向の活動へと発展している途上です。

このような当館の活動は、地域の皆様、本学教職員・学生の皆様からのご理解とご支援、そして大きな期待があってこそのものです。箕面市をはじめ関係の方々、当館をご利用くださるすべての方々に、深く感謝申し上げます。

今回の受賞を励みに、今後も図書館という開かれた場において、地域と大学のハブとなり、双方に貢献する活動を展開して、すべての利用者に親しまれ、誇りに思っていただける図書館を目指して参ります。この度は誠にありがとうございました。

大阪大学附属図書館